

# トクヴェイルと社会主義

杉 本 竜 也

はじめに

第一節 サンシモンとサンシモン主義

第二節 トクヴェイルの社会主義観

第三節 社会主義とフィジオクラシー

おわりに

はじめに

本稿は、アレクシス・ド・トクヴェイル Alexis de Tocqueville (一八〇五—一八五九) による社会主義評価について考察することを目的としている。

トクヴェイルと社会主義 (杉本)

三一五 (三九七)

トクヴィルが生きた十九世紀前半のフランスにおける最大の政治的・社会的課題は、社会の解体に対応することにあった。

社会が危機に瀕しているという認識が成立した背景には、二つの「革命」が存在していた。

第一の革命は、フランス革命に代表される市民革命である。市民革命は、個人という存在を析出することを通して、人々の意思に基づく政治的共同体を実現することに成功した<sup>①</sup>。社会契約説に代表される、このような社会理論は最終的には社会形成を目標としているが、その根拠を個人に求めていたため、いわば個人という存在の絶対性を理論的に主張するものとなった。

第二の革命は産業革命である。激しい政治変動のためにイギリスと比べて約一世紀の遅れをとっていたフランスの産業化だが、七月王政に入るとその遅れを取り戻すかのようにフランスは急激な経済成長を果たした。しかし、急速な成長は様々な「社会問題」(question sociale)をもたらし、とりわけ貧困 (pauperisme) の顕在化は当時のフランス社会を大きく動揺させることになった。この事態に対して、貧困とそれが惹起する社会の分断の原因を、産業化とそれを理論的に支持するイギリス流の古典派経済学に求める考え方が登場するようになっていった<sup>②</sup>。

つまり、市民革命と産業革命という、十八世紀後半から十九世紀の前半にかけてフランスに発生した二つの革命にはいずれも社会の分断という副作用が付随しており、そして実際にそれらに由来する負の作用が顕在化しつつあるという危機意識が、当時の一定の知識人や指導者たちの中には存在していた<sup>③</sup>。

本稿の研究対象であるトクヴィルも、またサン＝シモンをはじめとする社会主義者たち (socialistes) も、政治と経済の二つの革命に起因する社会的分断に対して危機感を抱いていた点は共通していた。サン＝シモンの表現を借りれ

ば、その危機的状況に対処するために社会主義者が目指したものは社会の「再組織化」(réorganisation)であり、彼らによれば十八世紀の哲学が革命的であったとするならば、十九世紀の哲学は「組織化的」(organisatrice)である必要があった。<sup>(4)</sup>これに対して、トクヴィルは社会主義者たちと同様の問題意識を共有しながらも、彼は社会主義に対しては終始批判的であった。いうなれば、トクヴィルは組織化または再組織化という社会主義が採用した手段とは異なる方法で、社会の崩壊に対応しようとした。

本稿においては、トクヴィルの考えと社会主義者の思想との相違を考えることを通して、社会問題や社会政策に対するトクヴィルの考えを明らかにすると共に、彼の政治・社会思想の本質について解き明かしていきたい。

具体的には、まずサン＝シモンおよびサン＝シモン主義者の思想と活動について見ていく。サン＝シモンやサン＝シモン主義者に対するトクヴィルの評価については本論の中で詳述するが、少なくとも十九世紀前半のフランスにおいて彼らの思想は単なる社会主義理論のひとつにとどまるものではなく、社会全体に広範な影響を及ぼすものとなっていた。そのため、この時代の社会主義思想を論じる上で、サン＝シモンとサン＝シモン主義者について考えることは必須である。

続いて、トクヴィルの社会主義観について、彼が残したノート等を材料に論じていく。

最後に、社会主義とフィジョクラット(重農主義者)の思想との関連性について考えていきたい。社会主義とフィジョクラシーを関連づける発想はトクヴィルにおいても比較的后期にあらわれるようになった見解であるが、彼のデモクラシー評価や社会観を考える上できわめて示唆的であるため、詳しく見ていきたい。

## 第一節 サン＝シモンとサン＝シモン主義

十九世紀前半のフランスにおける社会主義を考えるにあたり、サン＝シモン Henri de Saint-Simon (一七六〇—一八二五) の思想とサン＝シモン主義者たちの思想を避けて通ることはできない。

だが、サン＝シモンとその弟子であるはずのサン＝シモン主義者との間には、思想的な違いがうかがえる。サン＝シモン主義に関する代表的著作である『サン＝シモン主義の歴史』*Histoire du Saint-Simonisme, 1825-1864* (一九三一年) を著したセバステイアン・シャルレティ Sébastien Charlety (一八六七—一九四五) は「サン＝シモン主義者の歴史はサン＝シモンの死とともに始まる<sup>(5)</sup>」という文章をそこに残しているが、これはサン＝シモンとサン＝シモン主義者との間の思想的相違を表現したものと見えよう。それだけでなく、サン＝シモン自身もその生涯の中で思想を変化させているため、サン＝シモンとサン＝シモン主義の思想的内容と違いを正確に把握することは容易ではない。ここでは細かな点にとらわれず、彼らの思想の要点を把握しておきたい。

まず、サン＝シモンの主張の中核を占めているのは、「産業主義」(industrialisme) と呼ばれるものである。サン＝シモンにおいて「産業者」(industriel) とは、「社会のさまざまな成員たちの物質的欲求や嗜好を満たさせる一つないしいくつかの物的手段を生産したり、それらを彼らの手に入れさせるために働いている人たち<sup>(6)</sup>」のことであり、「国民の二十五分の二十四以上をなしている<sup>(7)</sup>」。要するに、サン＝シモンの社会構想は、国民の大部分を占めるであろう一般の民衆を主体とした平等社会実現を目指すものであった。そのため、彼は、啓蒙主義的な国家論が内在させている「人間による人間の支配」に対して批判的であった。なぜなら、啓蒙主義的な国家観では、被治者としての産業者

が統治者としての非産業者に自己の社会権や共同利害の管理・指導を「委ね」(laisser)て「託す」(charger)状態、換言すれば被治者の「政治的疎外」が発生することになるからであった。<sup>(8)</sup> よって、サン＝シモンは、自らの主張する「産業体制は完全な平等の原則に立脚している」<sup>(9)</sup> 必要があると考えた。彼は、産業主義もしくは産業体制という名の平等社会構想の実現を目指していたのである。

だが、その一方でサン＝シモンには従来の「階級」社会とは異なる、エリートを中心とした「階層」社会の構想があった。サン＝シモンは、「最も有能な人々」(hommes les plus capables)が自分たちの「特殊利益」(intérêts particuliers)の最大化に努めることができるようにするべきではないかと提案する。なぜなら、「最も有能な人々の特殊利益は、一般的利益 (intérêts généraux) に最もよく役立ちうる利益であるがゆえに、この方法は公益に有利な結果をもたらすための最良の方法だとわれわれには思われる」<sup>(10)</sup> ためである。ルソーの一般意志 (volonté générale) に代表されるように、「一般」(général)と「特殊」ないし「個別」(particulier)との関係性に関する議論は、市民や人間としての個の自由を最大限尊重しながらも、全体としての統合や統一を目指してきたフランスの政治的伝統において必要なものとされてきた。ここでは、「一般」という概念が公共性や徳性と関連づけられていたのに対して、「特殊」や「個別」は私益と結び付けられ、社会ないし国家にとっての危険や脅威として考えられた。ルソーに代表される共和主義的思想では「一般」と「特殊」、具体的には個人の自由と共同体の維持の両立が課題となったが、彼の一般意志という概念はそのような政治思想的難題を解決するために要請された概念であった。しかし、サン＝シモンは、有能な人物の特殊意志をそのまま全体を統べる意志へと読み換えるという一種の選良思想によってその解決を試みた。既述の通り、サン＝シモンは全社会の大半を占める産業者という名の民衆と完全な平等原則に基づく社会の成立という

大目標を掲げた他、公教育の充実も訴えていたことを合わせて考えれば、サン＝シモンの考えた社会は階層社会といつても万民に開かれたものになっている。だが、能力の有無という優劣を前提とした人間像が要件となっている以上、サン＝シモンの中に知的選良思想の傾向があったことは否定できないだろう。ただ、サン＝シモンにおける最大の目標は不労階級としてのアリストクラシーを国家や社会の意思決定過程から排除することであり、それと表裏をなす形で有能な人物に指導を託するという発想は生じたと考えられる。<sup>11</sup> シェルドン・ウォーリンは、サン＝シモンの中には、ヒエラルキーや従属、権威を特質とする組織 (organization) の論理と、十八世紀の革命理論が普及させた平等の要求は両立可能かつ必要であるという認識が存在していたと考えている。<sup>12</sup> そして、トクヴィルもまた、サン＝シモン主義の特徴として、そのヒエラルキー志向を挙げている。<sup>13</sup> サン＝シモンによれば、いかなる秩序も大衆的な基盤がなければ維持できないため、組織の原理も平等原理によって裏打ちされていることになる。さらに、これを成り立たせているのは人々の物質的欲求である。なぜなら、人々が欲しているのは物質的欲求の充足と物質的境遇の安楽化であり、組織的かつ科学的な生産によってそれらが叶うなら、組織の原理と平等原理はいずれも成立すると考えられるからである。すなわち、サン＝シモンが企図しているのは、科学の名に基づいた、経済による政治領域の支配である。彼自身にそのような意図はなかったとしても、物質的充足が統治の目的になっているとすれば、その考えは政治に対する経済の優位性の主張に帰着する他ない。であるとすれば、サン＝シモン自身の意向とは無関係に、結果としてその理論は、彼自らが危惧していた政治的疎外をひき起こす危険を内包していることになる。<sup>14</sup>

だが、サン＝シモンの思想は、組織化の追求から精神性の追求へと次第に変化を見せ始める。彼は、来たるべき産業社会の目標は生産効率の向上と社会全体での分配の増大にあると当初考えていたが、価値の生産のみに邁進するそ

のような産業社会ではそれを健全に維持する基本理念が欠落することになるのではないかと疑問を抱くようになった。<sup>15</sup> そのような意識の変化は、サン＝シモン晩年の著作である『新キリスト教』*Nouveau Christianisme*（一八二五年）に結実する。彼は従来の組織化の理論の不備を、そこに道徳的・宗教的性格を付与することによって克服しようと試みた。サン＝シモンは産業社会の規範的根本理念として「人間は互いに兄弟として振舞うべし」<sup>16</sup>を挙げ、それをこの著作の中で再三にわたって繰り返している。新キリスト教は、宗教改革等によって分裂してしまったキリスト教のみならず、あらゆる宗教をこの原理に帰一させることによつて成立する。そしてその最大の目的は「最も貧しい階級の境遇をできるだけ速やかに改善する」<sup>17</sup>ことにある。それまで物質的利益の実現と組織化に向けられていた彼の視点は、精神性の追求と貧困の解決に向けられるようになった。サン＝シモンは一八二五年に『新キリスト教』を絶筆としたまま死去するが、彼の死後、その弟子であるサン＝シモン主義者たちは組織化の理論以上に、師の思想の道徳的・宗教的要素を強調するようになっていく。

サン＝シモンが死んだ頃、別のいい方をすれば「サン＝シモン主義」(*Saint-Simonisme*)の草創期において、派の雑誌『生産者』(*Le Producteur*)の当初の中核メンバーは数学教師であり、銀行経営にも携わっていたオランド・ロドリゲ *Olinde Rodrigues*（一七九四—一八五二）であった。だが、グループの主導権は次第に、サン＝シモンから直接に指導を受けたことのないバルテルミー＝プロスペル・アンファンタン *Barthélemy-Prospér Enfantin*（一七九六—一八六四）とサン＝アマン・バザール *Saint-Amand Bazard*（一七九一—一八三三）に移っていった。これらの次世代の指導者によつて、サン＝シモン主義者は、『生産者』誌の普及とパリの「サン＝シモン教会」での説教を通して、経済学説や社会理論以上に宗教的な道徳思想として人々の間に浸透していく。組織化理論としてのサン＝シモン主義は、

『生産者』誌等を通して、国立理工学校 (École polytechnique) の学生の間を中心に広まっていった。現代にも続くフランスのエリート教育機関として知られるいわゆる「グランゼコール」(grandes écoles) の中でも、一七九四年に創設された国立理工学校は高級テクノクラートの養成を目的としていたため、その学生たちが合理主義的で工学的なエリート主義の国家指導原理を提唱したサン＝シモンの産業主義に共鳴したのは自然なことであろう。ただ、社会一般に対する影響や印象という点では、組織化理論というよりも、道徳・宗教思想としてのサン＝シモン主義の方が強い波及力を備えていた。一八二九年のクリスマス、サン＝シモン教会において、アンファンタンとバザールは最高指導者である「父」(Père) に選出された<sup>18)</sup>。シャルレティはこの二人について、バザールは教理における理性面を、アンファンタンは感情面を担ったと述べているが、この違いがサン＝シモン主義者たちの分裂を招くことになる<sup>19)</sup>。ローレンツ・シュタインは、バザールを「真のサン＝シモン主義者」と評価し、世間がサン＝シモン主義と見なしたものの大半はバザールによるものであったと記している<sup>20)</sup>。一方、アンファンタンは、元々は『新キリスト教』のような宗教的思想に違和感を覚えていたが、次第に自身が宗教的に傾斜していく<sup>21)</sup>。この二人が決定的に対立したのは女性論に関する議論であった。そもそも、サン＝シモンは女性の役割に関してそれほど興味を示していなかった。しかし、総合的な社会理論の構築を目指したアンファンタンたちは、自分たちの理論の中に女性を位置づけるため、男女一對の組を社会の基礎単位とする愛の理論を主張したシャルル・フーリエ Charles Fourier (一七七一—一八三七) の思想を摂取することを考えた<sup>22)</sup>。だが、当時すでに常軌を逸したものとして白眼視されていたフーリエの思想を取り入れたことで、サン＝シモン主義者たちも批判を受けてしまう。このような事態を受けて、一八三一年にはバザールらがグループから離脱し、サン＝シモン主義者のグループはアンファンタン派のみが残留するようになる。



この後、彼らはエジプト遠征を行ったり、アルジェリア移住計画やスエズ運河工事計画等を企画するなどしているが、広い支持を集めることなく、奇矯な集団としての印象を世間に残したまま、一八四八年の二月革命を迎えることになる。<sup>(23)</sup>

社会学の祖とされるオーギュスト・コント Auguste Comte (一七九八—一八五七) は、多くのサン＝シモン支持者が存在した国立理工科学校で学んだ経験があり、一八一七年から七年間、サン＝シモンの秘書を務めていた。サン＝シモンとコントは後に決裂することになるが、蜜月時代の彼らは共同で執筆活動も行っていた。<sup>(24)</sup> 彼らはフランス革命以降、混乱が続いてきたフランス、さらにヨーロッパ社会の再組織化を目標としており、そして迷信ではなく、社会秩序が依拠すべき根本原理として宗教ないし宗教的思想を理解していた。<sup>(25)</sup> 啓蒙思想の時代に育ったサン＝シモンやサン＝シモン主義者たちは、合理主義や可塑的社会観に基づく設計可能性に疑いを挟まなかった。また、彼らの宗教的思想も本来は社会の根本原理を追究した結果として導き出されたものであり、いってみれば彼らの理論における社会現象と宗教の関係は自然現象と科学法則の關係に類似していた。そのため、サン＝シモンの思想は、一貫して「科学」であったとすることができる。しかしながら、宗教や道徳といったものは必ず何らかの主観的要素を内在させているため、科学としての一貫性を完全に徹底することは難しい。そこにサン＝シモンの思想およびサン＝シモン主義的思想的变化の原因を見出すことができる。<sup>(26)</sup> サン＝シモンの思想にとつての不幸は、その本来の意図から離れ、当時の人々から奇妙な思想として受け取られてしまったことにある。組織化の理論としてのサン＝シモンの思想はテクノクラートの中で浸透していったとしても、大衆化の時代において世評は大きな意味を持つ。サン＝シモン主義の場合、一時は一定の支持を受けていた分、負の評価も拡大しやすかった。結果として、サン＝シモンたちの思想は、自らの

活動が原因の一部であるとはいえ、不当に低く、歪曲された印象を持たれることになった。

サンシモンやサンシモン主義者に対するトクヴィルの見解や評価に関して、アンドレ・ジャルダン<sup>27</sup>は、トクヴィルはサンシモンやフリーエ、ロバート・オーウェン Robert Owen (一七七一一八五八) の著作は読んでいたが、それらに関するノート類は残っていないとしている。他方、ヒュー・ブローガンは、トクヴィルがサンシモンやサンシモン主義者の考えを認識し、一定の知識を有していたことを指摘している。トクヴィルは『アメリカのデモクラシー』(第二巻)の中で、ヨーロッパにはただ男女平等と言うだけでなく、男女は完全に同じ存在だと主張する人々が存在するが、そのような考えは両性を共に貶めることにつながると批判している。<sup>28</sup>ブローガンによれば、ここでいわれている男女の同一を主張している人々とはサンシモン主義者である。<sup>29</sup>トクヴィルの青年期から壮年期に該当する一八三〇年代から一八四〇年代にかけて、サンシモン主義者グループが奇異の目で見られていた主たる理由は、既述の通り、彼らの女性観にあった。トクヴィルの見解は自らのデモクラシー論に基づくものであるが、そこに世評の影響が皆無であったと言いつけることは難しい。

少なくとも、トクヴィルがサンシモン主義者たちの行動や言動に関心を持っていたことは明らかである。ブローガンは、トクヴィルがアンファンタン宛の私信を認めていたことを明らかにしている。<sup>30</sup>それはアンファンタンから送られた著作の写しに対する返信として書かれたものであった。そこではアンファンタンの著作の中に貧困者に対する配慮が満ちている点が指摘されており、人間の歴史はあらゆる生産物を共有する平等化に向かっていると述べられている。

トクヴィルがサンシモンやサンシモン主義者たちの思想を詳細に分析した明確な証拠は明らかになっていない

し、もちろんそれに関する著作も存在していない。そのため、彼がこれらの思想に対していかなる評価を下していたのかを明言することはできない。ただ、ほぼ確実にいえるのは、トクヴィルがサン＝シモンやサン＝シモン主義者たちの著作を読み、文字に起こさないまでも一定の考察を行っていたということ、そして多少は世間の評判に影響されていた可能性は否定できないまでも、これらの思想を冷静に理解しようと努めていたことである。

ただ、それでもトクヴィルは、サン＝シモン主義をはじめとする社会主義に対して、批判的な姿勢を崩すことはなかった。その理由は、サン＝シモンたちの考え方に限らず、広く社会主義という範疇に含まれるあらゆる思想が共通して抱えている問題、いふなれば社会主義の本質的危険性にあった。

## 第二節 トクヴィルの社会主義観

トクヴィルは、社会主義に関するノートを残している<sup>(31)</sup>。それが書かれた正確な時期は不明だが、二月革命後に書かれたものと推測され、彼の社会主義観を理解する大きな助けになる。よって、本節ではこのノート等を材料として、トクヴィルの社会主義観について考えていく。

このノートの冒頭で、トクヴィルは社会主義を「一種の奴隷制 (esclavage)」だと定義する。社会主義は人々の境遇の改善という意図を有しているだけでなく、それを制御しようという意思も持ち合わせている。社会主義は人間の個性や自立性を否定し、権力の重要性を強調させるものになっているため、絶対王政や教権主義の政治理論を彷彿とさせる。

トクヴィルが見るところ、社会主義には二つの種類がある。第一の社会主義は、財産やその境遇において平等な社

会を理想とするものである。第二の社会主義は、国家が各人の能力に応じて形成するヒエラルキー社会を目指すものであり、トクヴィルはその代表としてサンシモン主義を挙げている。

また、トクヴィルは、社会主義理論というものが、労を厭い、安易に財産を所有することを望む人々のための手段になってしまっている点も指摘している。

トクヴィルはこのように社会主義全体を評価した上で、個々の社会主義思想を次のように説明している。

無政府主義者のピエール・ジョセフ・プルードン Pierre Joseph Proudhon (一八〇九—一八六五) は、物質的充足 (bien-être) を求める熱烈な思いや際限ない消費欲が社会的な課題になっていくと考えた。サンシモン主義者のグループに属した経験のあるピエール・ルルー Pierre Leroux (一七九七—一八七二) は、国家は知的な守護者・番人の役割を果たすべきだとした。

トクヴィルは、古い時代の社会主義者として、サンシモンとプラトンを挙げている。サンシモンは汎神論を支持し、相続制度を廃止し、ヒエラルキーという形での秩序形成を主張した。プラトンは私有財産制と貧困の根絶を共に説き、共同生活の有効性を示して、特権階級と奴隷階級によって構成される階級制度を構想した。

それ以外にもトクヴィルは、サンシモン主義者を、中央権力が各人の能力に従って人々を格付けし、財産の分配を行うことを望む人々だと定義している他、共産主義者 (communists) については人工的で政治的な手法を用いて相続財産の平等化を目指している人々だと記している。トクヴィルの同時代人であり、二月革命後の臨時政府のメンバーにもなった詩人ルイ・ブラン Louis Blanc (一八一—一八八二) については、社会的権力 (pouvoir social) によって生産が統制され、国家を巨大な企業家にすることを望む人物として描いている。「ファランステール主義者」

(Phalanstériens) すなわちシャルル・フーリエ Charles Fourier (一七七二—一八三七) の思想の信奉者に関して、すべての人々に共同生活を強いて、不動産を産業用財産へと転換することを求める人々だとしている。

これらの様々な社会主義者に関して、トクヴィルは「ある者は私有財産の破壊を、ある者はその変質を、またある者はそれを制限し、そして別のある者はそれを管理しようとしている」と記している。社会主義者や社会主義思想はいずれも家族制度を攻撃対象としており、個人という存在を抑圧・統制するものであり、人々の能力や権利に制限を課すものである。トクヴィルが、社会主義を奴隷制の理論と批判した理由はこのような点にあった。

さて、このノートとは別に、二月革命の『回想録』*Souvenirs* (一八九三年) においても、社会主義は主要なテーマとして扱われている。

これらの理論〔社会主義理論〕は相互に著しく異なっており、しばしば反対の意味を示し、また時に敵対もしていた。けれども、それらはすべて政府よりも深いところを狙い、その基礎となっている社会自体を手に入れようと努めており、そして社会主義という共通の名前を名乗っていた。<sup>32</sup>

この個所でトクヴィルは、特定の社会主義思想について論じるのではなく、社会主義と称している、もしくは社会主義に類すると考えられる思想を一括して分類し、それらがいずれも「社会」(society) 全体の直接的・構造的改変を試みる思想であることを指摘している。市民革命前の思想に重要なことは、政治制度・政治機構上の個人の自由と権利を擁護し、特に市民階級の政治参加を可能にする点にあった。しかし、市民革命によって名目上は政治的自由が

実現されると、産業化・市場経済化の進展による貧困や格差の顕在化によって、それらの社会問題の解決こそが最大の課題として浮上するようになり、その解決も社会的に行われる必要があると意識されるようになった。トクヴィルが、二月革命前に行った議会演説において、人々の関心が彼らの情熱が「政治的」(politiques)なものから「社会的」(sociales)なものへと変化したことを指摘したのは、そのような意識の拡大を認識していたためであった。<sup>33</sup> 社会主義はそのような時代的要請に応えるものとして登場したのであり、トクヴィルはそのような社会主義の性格を看破していた。彼は、「社会主義の理論」(theories socialistes)が民衆の「嫉妬」(jalousies)をかき立てたことよって発生した階級闘争革命だとして二月革命を定義した。<sup>34</sup> 中でも、国立作業場廃止を巡って発生した労働者の暴動である六月暴動について、トクヴィルは、「政府の形態を変えることではなく、社会の秩序を変化させることを目的」としている点がフランス革命からの六十年間に起きた様々な出来事の中でも特徴的であること、またそれが「政治闘争」(lutte politique)ではなく、「階級の戦い」(combat de classe)であり、「一種の奴隷戦争」(une sorte de guerre servile)であったことを記している。<sup>35</sup> 社会主義は文字通り、社会に注目し、現状の問題解決を社会の改造によって実現しようとする思想であった。社会主義は、政治から社会へと意識の対象を変化させていった人々にとって、自分たちの感情や行動を正当化するための理論となった。

社会主義に関するノートと『回想録』の内容をまとめると次のようになる。

まず、社会主義には、財産と境遇において平等を志向する考え方と、ヒエラルキーに基づく社会の形成を志向する考え方の二種類が存在する。社会主義は、人々が安易に物質的欲求を満たし、自身の境遇の改善を図るための手段のようになっているが、同時に人間の個性を否定する危険を内包したものである。そのため、トクヴィルは、社会主

義を「奴隷制」のための理論と呼んだ。加えて、社会主義は、「社会」の根本的変革を求める思想でもある。そしてそこには人々の嫉妬が作用しているが、これも彼らの物質的欲求に由来している。トクヴィルは、デモクラシー下の人々の性格的特徴として、「物質的安寧の追求」(gout du bien-être)や「物質的安寧への情熱」(passion du bien-être)を挙げているが、その意味で社会主義という思想はきわめてデモクラシー的だといえることができる<sup>36</sup>。つまり、社会主義とは、究極的にはデモクラシーの中で生きる人々の物質的利益への執着心に由来していることになる。

たとえば、一八四八年九月十二日に行われた憲法制定議会(Assemblée constituante)の憲法起草委員会における労働権(droit au travail)をめぐる議論の中で、トクヴィルは、社会主義が「人々の物質主義的な情熱」(passions matérielles de l'homme)を刺激するものであること、私的所有の原則を攻撃するものであること、そして人間の理性と自由に対する不信感に根差したものであることを理由に、社会主義に結び付くと思われていた労働権の導入に反対している<sup>37</sup>。これなどは、トクヴィルが物質的安寧に対する人々の情熱と社会主義を関連づけていたことの証左であり、そのような事態に対する彼の懸念を示したものといえる。

### 第三節 社会主義とフィジオクラシー

トクヴィルが、社会主義という思想と運動を具体的に検討するようになったのは一八四〇年代以降のことである。とりわけ、二月革命はトクヴィルの社会主義観に大きな影響を与え、これ以降彼にとって社会主義は単なる理論ではなく、現実的かつ具体的な脅威として認識されることになる。二月革命後、臨時政府は国立作業場の設置を決定し、憲法制定議会では労働権に関する議論が行われるようになった。この動きの中で、トクヴィルは社会主義に対しても、

労働権に対しても否定的な立場を取る。これまで思索上のものであった新種の専制が社会主義という形で現実化し始めたことが、トクヴィルの社会主義観に変化をもたらした最大の契機となった。彼の社会主義論の原型は早期の著作の中にもうかがえるが、本格的な思索は一八五六年の『アンシャン・レジームと大革命』*L'Ancien Régime et la Révolution* にしか見られない。この中で、トクヴィルは社会主義と重農主義すなわちフィジオクラシー (physiocratie) との思想的な関係性を取り上げている。

今日、「社会主義」という名前で呼ばれている破壊的な理論は最近生まれたものだとは広く信じられているが、それは誤りである。この理論は、初期のフィジオクラット (Economistes) と同時代のものである。フィジオクラットたちは社会の形態を変えるために自分たちが夢想した全能の政府を用いたが、社会主義者たちは社会の基礎を破壊するために想像の中で同じ力を奪取した。

モレリーの『自然の法典』を読んでみるといい。国家の全能性や無制限の権利に関するフィジオクラットの学説と共に、このところフランスを最も恐れさせている政治理論のいくつも見出すことができるだろう。それはたとえば、財産の共有や労働の権利、絶対的な平等、あらゆる事柄における画一性、個人の活動における機械的な規則性、規則を強制する専制、そして市民の個性を社会の中に完全に埋没させること等である。<sup>38)</sup>

エティエンヌ・モレリー Etienne Morelly (一七二七—一七七八) は十八世紀フランスのユートピア思想家であり、私有財産制のない平等社会を提唱した。モレリー自身はフィジオクラットではなかったが、トクヴィルは彼の著作の



中にフィジオクラットの思想と同様に社会主義に通じる特徴が見出せることを指摘している。トクヴィルはフィジオクラシーから社会主義が生まれたというのではなく、これらが共通の思想的背景を有するものであることをモレリーを引いて示したのである。そのため、フィジオクラットについて考えることは、トクヴィルの社会主義観を理解する上で大きな意味がある。

フィジオクラットを代表する人物であるフランソワ・ケネー François Quesnay (一六九四—一七七四) が提唱した経済政策の眼目は、ルイ十四世治下の財務総監ジャン＝バティスト・コルベール Jean-Baptiste Colbert (一六一九—一六八三) の重商主義政策の是正にあった。イギリスやオランダと比べて経済的に劣位にあった十七世紀のフランスは、貿易収支の黒字化のために高級織物やガラス、陶器等の奢侈品生産を偏重し、国民生活に直接的に影響する農業を軽視した。また、製造品の輸出を拡大するために低賃金政策とそれを可能にする穀物低価格政策が採用されたことから、フランス農業は致命的な打撃を受けていた。<sup>(39)</sup> このような事態を打開するためにケネーが主張したのが、「良価」(bon prix) の保証と「純生産物」(produit net) の確保であった。<sup>(40)</sup> 良価とは生産費に一定の利潤を加えた価格のことであり、これは重商主義による人為的な穀物低価格政策を破棄し、穀物の流通を海外も含めて自由化した時にのみ実現される。また、純生産物とは生産物の売上価値から必要経費を控除した余剰部分のことだが、ケネーはあらゆる産業の中で純生産物を生み出し得るのは農業だけだと考えた。ケネーはこの経済関係を「経済表」(tableau économique) として図式化する。そして経済表に基づく秩序を「自然法」と呼んだ。そして為政者に求められるのは、この自然法が適切に機能する環境、いわば自由主義的経済体制を維持整備することにあつた。

ケネーは、自身の政治・経済構想に関して、「農業王国の経済統治の一般準則」(Maximes générales du gouvernement

économique d'un royaume agricole) を示している。<sup>(41)</sup> 三十項目ある準則の中で、ケネーは土地が富の源泉であり、その富を殖やすことができるのは農業だけであること(第三準則)、経済秩序の根本は不動産と動産の所有権(propriété)の安全にあること(第四準則)を明記している。その他にも農業生産が富の増大に有効である理由や適正な価格の維持、道路や航路の整備の必要性や自由交易の重要性などが説かれているが、ケネーの権力像を理解する上で注目するのは第一準則と第二十七準則である。まず第一準則において、彼は主権(autorité souveraine)が唯一(unique)のものであり、社会のあらゆるものに対して優越している(supérieure)ことを求める。そして第二十七準則では、多大な支出も富の増加のためであれば適正なものとされるため、政府は節約に専念するよりも、王国の繁栄に必要な事業に専念すべきだと述べている。絶対的かつ唯一的な主権が個別的利害を調整して、自らがあたかも事業者のように経済を牽引していく。トクヴィルは、十九世紀のフランス国家の姿を、「工業製品の最大の消費者(consommateur)」<sup>(42)</sup>「この国における最大の事業者(entrepreneur)」と表現している。ケネーの準則を見ると、そのような国家の姿はすでにフィジオクラットによって準備されていたことがわかる。つまり、フィジオクラットは、本来政治的主体であった国家という存在を経済的主体として再定義する思想の大枠を提供したのであった。

この考え方は経済的には有効だとしても、政治思想的に考えた場合、深刻な問題をはらんでいる。貴族も同業組合も顕在であった当時、上記のような経済表に則った体制を実現するには、第一準則によって示された強力な権力が具体的に求められなければならない。そこでケネーは、かつてモンテスキュー Charles Louis de Montesquieu (二六八九—一七五五) が批判した中国の専制(despotisme)を理想として、これを評価するに至る。モンテスキューは「不協和の調和」(harmonie de dissonance)という概念を提示し、それを政治的自由の条件と考えた。<sup>(43)</sup> 彼は複数の権力主

体の対立を内包しながらも全体としては調和が実現されている政治秩序を提示しているが、これは専制とは互いに相容れない政治体制である。また、モンテスキューがその多元的な政治社会の構成要素と考えたのは貴族を筆頭とする封建的諸勢力であったため、彼の議論はフランス自由主義政治理論の嚆矢であると同時にフランスにおける保守思想の源流と見ることも可能である。いわばモンテスキューは既存の勢力の存在意義を肯定的に読み替えることによって、これらを新たな政治的自由のための条件として位置づけた。だが、その一方でこれらの存在は農民たちに対して貢租等の封建的拘束を様々な形で課しており、農産品の自由な生産とその流通の障害となっていた。自由な農産品流通によつて国富の増大を目論むケネーにとつて、様々な特権 (*privilege*) によつて経済を遅滞させる封建的勢力を権力的に抑えることは不可欠であり、それが専制への期待につながっていった。

ケネーは、一七六七年の『中国の専制』*Despotisme de la Chine*の中で、完全唯一の至高権によつて統治されている中国の政治体制を専制と把握し、これを評価する。<sup>(44)</sup>ただし、専制には、法 (*lois*) によつて規制された絶対的権力を行使する君主による「合法的専制」(*despotes légitimes*) と、専横的な権力を篡奪して国民に対してそれを行使し、根本法 (*lois fondamentales*) による制限も受けない「恣意的専制」(*despotes arbitraires*) の二種類がある。ケネーはこのうち前者を支持しているため、彼も専制を無分別に受容したわけではなく、自然法が最大限有効に適用される健全な君主政を志向したというべきであろう。この点に関して、アルバート・ハーシュマンは、ケネーをはじめとするフイジオクラットたちが政治の失敗を考慮していたため、彼らは経済の拡大だけに問題解決の糸口を求めめるのではなく、正しい経済政策を可能とするような新しい政治秩序の構築に傾いていったことを指摘している。<sup>(45)</sup>要するに、ケネーたちは、政治的専制によつて新たな経済的自由を実現しようと試みたのであった。<sup>(46)</sup>トクヴィルは、フイジオク

ラットについて、彼らは自由放任 (laisser faire, laisser passer) を主張していたが、政治的自由は忘れていたといっているが、正鵠を射た評価といえるだろう。<sup>(47)</sup>

ケネーの考える専制にはもうひとつ、市民の所有権を後見的 (tutelaire) に守護するという役割が期待されていた。ジョン・ロック John Locke (一六三二—一七〇四) から少なからぬ影響を受けていたケネーは、自然法に則ってなされた各人の労働の獲得物に対する権利として自然権を理解しているが、ここで権力に期待されているのはそのような各人の自然権を擁護することであり、統治者は「後見的権力」 (puissance tutelaire) あるいは「後見的権威」 (autorité tutelaire) であることが求められる<sup>(48)</sup>。ケネーの理論において、権力は抑圧する存在から民衆を保護する存在への役割転換が要請されており、具体的には経済的権利の擁護と増進が求められていた。要するに、ケネーが目指していた権力は、国民の経済的利益を守り、そのさらなる増大を支援する後見的な専制体制であった。自由はきわめて政治的な概念だが、ここにおいては経済的範疇にも適用されている。ただ、そのような自由観はロックにおいても同様であったが、ケネーの場合は経済における自由のために政治における自由が犠牲に供されている点に最大の特徴があり、またそれこそ最大の問題であった。

トクヴィルにとって、ケネーの主張した専制は、自身のデモクラシー理論で批判した「民主的専制」 (despotisme démocratique) に通じる性格がある。そのため、トクヴィルにとって、フィジオクラットの問題は同時代的な意味を持つていた。

フィジオクラット (économistes) たちが想像したこの巨大な社会的権力は、彼らの目前にある他のいかなる権力

よりも強大だというだけではない。その起源においても、その特性においても、この権力は従来のものとは異なっている。この社会的権力は直接的に神に由来するものでもなければ、伝統とも無関係であり、そして非人格的である。それはもはや王ではなく、国家と呼ばれるべきものである。それはある家族の遺産などではなく、全体から生まれた産物であり、全体の代表である。そして個人の権利は、この全体の意思に屈服させられるのである。

民主的専制という名前のこの特殊な形態の専制は、中世であれば思いもつかないものであったが、フィジオクラットにとつてはすでに馴染みのものになっていた。社会内の階層化は進み、階級の存在が明らかになり、身分は固定化された。そのような中で民衆という存在は、ほとんど同じような、完全に平等な個人によつて構成されている。この寄せ集めの大衆は唯一の正統な主権者として認知されているが、自らの政府を自分自身で指揮し監督することを可能にするあらゆる権能は周到に奪われている。大衆の上にあるのは、大衆の意見に耳を傾けることなく、大衆にかわつてあらゆることを行う唯一の受託者 (mandataire) だけである。これを監督するためには、具体的な手段を持たない公共の理性が求められる。これを阻むものは革命であつて、法ではない。この受託者は法的には従属的な代理人に過ぎないが、実は支配者なのである。<sup>49)</sup>

トクヴィルによれば、デモクラシーの中で生きる人々によつて民主的専制が要求されるのは、物質的安寧に対する彼らの執着が理由であつた。デモクラシー下の人々が物質的利益を熱烈に求めることについては前節でも触れたが、民主的専制はそのような人々の要求に応える「与える」専制体制としての役割を担う。

これに加えて、トクヴィルがフィジオクラットの文脈で民主的専制を語る際に重視しているのは、統治権力の性格

である。<sup>50</sup> トクヴィルは、著書の中で、ケネーが権力均衡を致命的欠陥をはらんだ制度だと述べていたことも引用している。<sup>51</sup> かつて、トクヴィルが自身のデモクラシー理論を構築した際に最も注意を向けたのは人々の心理であった。彼がそのような接近法を採用したのは、市民革命後のデモクラシーがもはや理想ではなく与件となったことが影響していると思われる。他方、フィジオクラットを論じる際のトクヴィルは権力論を重視しているが、これは今回引用した『アンシャン・レジームと大革命』が書かれた時期が要因として推測できる。トクヴィルがこの著作に取り組んだのは、彼がルイ・ナポレオンのクーデタ（一八五一年十二月）によつて政界引退を余儀なくされた後の一八五二年のことであり、実際に出版されたのは一八五六年であった。トクヴィルが引退した一八五二年には、ルイ・ナポレオンは国民投票を経て帝位に就き、第二帝政が始まっている。すなわち、トクヴィルが『アンシャン・レジームと大革命』を書いたのは、第二帝政が新たな国家体制を確立しようとしていた只中であり、いわば革命前の時代への逆行してしまつたかのような状況にあつた。そのため、トクヴィルはあらためて政体論や権力論を論じなければならなかつたのではないだろうか。絶対王政から革命、そしてナポレオン帝政を経て、何とか政治的自由と経済的發展を遂げてきたはずであつたが、フランスはこの半世紀の蓄積を無にするかのように独裁・専制へと回帰してしまつた。そのような中で『アンシャン・レジームと大革命』を書いていたトクヴィルは、一世紀以上前のフィジオクラットの文章の中にこの新たな専制の原型を見出したのである。フィジオクラットと社会主義が同じ背景から生まれたものであるとすれば、その帰結も共通したものとなるはずである。それが専制、より正確に言えばデモクラシーという新しい時代に、物質的安寧を求める人々の求めに応える民主的専制である。要するに、フィジオクラシーや社会主義が到達するものは、いずれも専制ということになる。デモクラシーも悪性化した場合は専制を招く恐れはあるが、デモクラシーは適

切な対策を講じることができれば専制を予防することは可能であり、それどころか従来以上に市民の自由を増進することもできる。だが、人々に対して抑圧的で統制の強いフィジオクラシーや社会主義には、そのような可能性は見出せない。そのため、フィジオクラットの思想はトクヴィルにとって批判の対象以外の何ものでもなかった。

### おわりに

ここまでの考察を踏まえた上で、トクヴィルの考えに沿って社会主義の特徴をまとめると次のようになる。

第一に、社会主義はもはや「政治」ではなく、「社会」の改変を目指す思想である。よって、政治を対象とした啓蒙時代や市民革命期の思想と比べると、社会主義の射程はより広範で、より深い。そして社会主義の根底にある、社会に対する意識の高揚は、政治的・市民的自由の軽視と表裏をなしている。社会主義的な手法による社会的課題の解決は社会の画一化や個人の没個性化を伴うため、個人の尊厳や個人の思想の自由は犠牲とされることになる。また、サンシモン主義のように宗教的な色彩を帯びた場合、それは人の心に直接的に作用を及ぼす。いずれにしても、社会主義は個人の内面に直接的に影響を及ぼすことを躊躇しない点に、そして人間の精神の自由を抑圧する点に危険を内包している。トクヴィルが、社会主義を奴隷制の思想だと厳しく断罪した理由はそこにある。

第二に、多くの社会主義において目標とされたのは、社会の「組織化」(Organisation)である。社会主義者の多くも社会問題に懸念を示していたが、それ自体は必ずしも第一目標ではなく、彼らは社会の組織化が実現されれば、自ずと社会問題も解決されると考えた。彼らは組織化を工学的手法によって実現しようと考えており、サンシモンやサンシモン主義者が主張した産業体制はその典型である。この手法が肯定されるのは、効率的な産業活動によって

生産が拡大され、それを通して物質的充足が実現されるためである。よって、社会主義者のいう組織化とは産業すなわち経済による組織化であり、ひいては物質主義の肯定を意味する。要するに、社会主義においては、政治は物質主義に従属することになるのである。

第三に、社会主義は最終的に専制に到達する他ない。トクヴィルが社会主義と同じ素地から生まれたと考えるフィジオクラシーは、政治的自由を二の次にして露骨に専制を求めた。よって、社会主義も生来的に専制に対して親和的だと考えられる。次いで、サンシモンやサンシモン主義者の理論では、最終的には高級テクノクラートの指導に服さない限り、組織化は困難である。このように、社会主義は専制に肯定的であり、ヒエラルキー的な階層制度を前提とする思想である。

ここまで見てきたことからわかるように、社会主義がトクヴィルが育んできた思想の対極に位置するものであることは明白である。彼にとって社会主義とは奴隷の思想であり、思想を統制し、物質主義を喚起し、専制を招来するものに他ならなかった。社会主義のこのような帰結は、彼がデモクラシーの悪しき帰結として警戒してきたことそのものであった。

トクヴィルの社会主義評価に決定的な影響を与えたのは、二月革命とその後の六月事件である。それまで思索の対象に過ぎなかった社会主義が、具体的な脅威として顕在化したのがこの時であった。そのため、二月革命後、特に六月事件後のトクヴィルは、「社会に秩序と規律を打ち立て、革命派と社会主義者たちを打破する全ての措置に躊躇なく賛成票を投じた」のであった。<sup>52</sup>そして、その後、彼は『アンシャン・レジームと大革命』を執筆する段階に至り、絶対王政末期の状況や思潮を丹念に考察した結果、社会主義とフィジオクラットとの思想的な類似性と関連性を見出



すことになった。

トクヴィルに限らず、当時指導的立場にあった政治家の多くは、社会主義に対して否定的であった。数少ない例外が実際にサン＝シモンの思想を学んだ経験のあるルイ＝ナポレオンだが、そしてそのナポレオンがクーデターによって帝政を始めたことを考えると、トクヴィルが抱いていた危惧は杞憂ではなかったといえることができる<sup>(53)</sup>。

トクヴィルがアンファンタン宛てに手紙を書いていたことは本論において取り上げたが、その内容からもうかがえるように、トクヴィルも社会主義者たちと共に、貧困問題とそれに苦しむ民衆の境遇に対する関心と同情を抱いていた。そしてトクヴィルは一八四〇年代の後半に入ると、積極的に社会政策を打ち出すようになる<sup>(54)</sup>。けれども、彼は決して社会主義に同意することはなかった。トクヴィルは自由に対する強烈なまでのこだわりを決して放棄することはなかった。この自由に対する執心が、彼に社会主義を否定させたのである。フランスにおいて「連帯」(solidarité)という概念が主張されるようになるのは十九世紀後半、イギリスのホブハウスらによって新自由主義(New Liberalism)が主張されるようになるのはトクヴィルの死から半世紀以上経った二十世紀前半のことである。トクヴィルの時代には、人間の自由の尊重と社会問題の解決は必ずしも一致していなかった。それらが一体的に理解されるようになるには、いましばらくの時間が必要であった。

〔本稿は、本稿執筆者による学位論文「アレクシス・ド・トクヴィルの政治・経済論 デモクラシー・産業化社会における道徳性に関する考察」の一部に対して、大幅に加筆修正を施したものである。〕

- (1) 樋口陽一『近代国民国家の憲法構造』(東京大学出版会、一九九四年) 四七頁。
- (2) 当時のフランスの経済学者アルバン・ド・ヴィルヌーヴ・バルジュモン Alban de Villeneuve Bargemon (一七八四—一八五〇) は、アダム・スミスやジャン・バティスト・セイらによる古典派経済学はプロテスタント的・個人主義的・自由主義的で貪欲な経済理論であり、これこそが貧困の原因だと批判している [Seymour Drescher, *Dilemmas of Democracy, Tocqueville and Modernization* (Pittsburgh, University of Pittsburgh Press, 1968), p. 104. [シーモア・ドレッシャー『デモクラシーのディレンマ』桜井陽二訳(荒地出版社、一九七〇年) 九三頁]】。
- (3) この時代の主要な思潮である自由主義も、そのような政治・社会状況の中から生まれたものであった。松本礼二は、フランス革命と産業革命という「二重革命」がひき起こした「ポスト革命期」の中で誕生した様々なイデオロギーのひとつとして自由主義を定義し、それはフランス革命の成果を守ると同時に急進化と反動化という革命の悪循環を絶ち切り終結させるという二重の課題を負っていたという評価を下している [松本礼二／川出良枝『近代国家と近代革命の政治思想』(放送大学教育振興会、一九九七年) 一一六—一二七頁]。
- (4) Henri de Saint-Simon, “De la réorganisation de la société européenne ou de la nécessité et des moyens,” in *Œuvres Complètes II* (Paris, Presses Universitaires de France, 2012), p. 1247. [サン＝シモン「ヨーロッパ社会の再組織(二)』『サン＝シモン著作集』(第二卷) 森博編・訳(恒星社厚生閣、一九八七年) 二〇〇頁]。
- (5) Sébastien Camille Gustave Charléty, *Histoire du Saint-Simonisme, 1825-1864* (Paris, Paul Hartmann, 1931), p.25. [ヤンステイアン・シャルレティ『サン＝シモン主義の歴史』沢崎浩平／小杉隆芳訳(法政大学出版局、一九八六年) 三二頁]。
- (6) Henri de Saint-Simon, “Catéchisme des industriels,” in *Œuvres Complètes IV* (Paris, Presses Universitaires de France, 2012), p. 2876. [アンリ・ド・サン＝シモン『サン＝シモン著作集(産業者の教理問答)』(第五卷) 森博訳(恒星社厚生閣、一九八八年) 二頁]。
- (7) Saint-Simon, *Catéchisme*, p. 2881. [邦訳八頁]。
- (8) 藤原孝「サン＝シモンの後期国家論序説」(『政経研究』第三十七卷第三号、二〇〇〇年) 六六一—六七頁。

- (9) Saint-Simon, *Catéchisme*, p. 2905. [邦訳二八頁]。
- (10) Saint-Simon, *Catéchisme*, pp. 2977-2978. [邦訳二二六頁]。
- (11) サン＝シモンは、キリスト教の創始から十五世紀まで、人類は「一般的感情」(sentiments généraux) および「唯一にして普遍的な原理」(principe universel et unique) の確立と、「出生にもとづくアリストクラシー」(aristocratie de la naissance) から「才能にもとづくアリストクラシー」(aristocratie des talents) への移行を実現するために努めてきたが、個別性を理想としたマルティン・ルターの宗教改革によってその努力が途絶されてしまったと考えており、人類はその努力を再開しなければいけないと訴えている [Henri de Saint-Simon, “Nouveau christianisme,” in *Œuvres Complètes IV* (Paris, Presses Universitaires de France, 2012), p. 3221. [アンリ・ド・サン＝シモン『サン＝シモン著作集(新キリスト教)』(第五卷) 森博訳(恒星社厚生閣、一九八八年)二八九―二九二頁]。
- (12) Sheldon Wolin, *Politics and Vision, Continuity and Innovation in Western Political Thought, Expanded Edition* (Princeton, Princeton University Press, 2004), p. 338. [シェルドン・ウォーリン『政治とヴィジョン』尾形典男／福田歓一／佐々木武／有賀弘／佐々木毅／半澤孝磨／田中治男訳(福村書店、二〇〇七年)四三五―四三六頁]。
- (13) OC, III-3[Écrits et discours politiques], p. 189.
- (14) ウォーリンは公共性を最大限配慮した「政治的なるもの」(the political) に対して、そういった規範性を喪失し、主に経済等によって代替されてしまっている現在の政治状況を「政治」(politics) と呼んで批判し、そのような潮流を「政治的なものへの攻撃」と考えた [Wolin, p. 371-376. [邦訳四七六―四八三頁] および川崎修『政治的なるもの』の行方』(岩波書店、二〇一〇年) 八七―九〇頁]。ウォーリンは現代政治が経済によって歪曲されていると警鐘を鳴らしているが、彼はそのような傾向を形作った主要人物としてサン＝シモンを取り上げ、厳しい批判を加えている。
- (15) 藤原孝「サン＝シモン思想における『新キリスト教』の位置」『政経研究』第三十三卷第一号、一九九六年) 四七六頁。
- (16) Saint-Simon, *Nouveau Christianisme*, p. 3184. [邦訳二四六頁]。
- (17) Saint-Simon, *Nouveau Christianisme*, p. 3189. [邦訳二五一頁]。

- (18) フランス語で *«père»* は「父」「神父」といった意味だが、頭文字を大文字にすると「神」という意味になる。サン＝シモン支持者の間でアンファンタンとバザールの神格化が進んでいたことがうかがえる。
- (19) Charlety, p. 66. [邦訳七四―七五頁]。
- (20) ローレンツ・シュタイン『平等原理と社会主義 今日フランスにおける社会主義と共産主義』石川三義／石塚正英／柴田隆行訳（法政大学出版局、一九九〇年）二二五頁。
- (21) Charlety, p. 63. [邦訳七一―七十二頁]。
- (22) Charlety, p. 125. [邦訳一二四頁]。
- (23) スエズ運河建設に尽力した外交官フェルディナン・ド・レセップス Ferdinand de Lesseps（一八〇五―一八九四）は青年期にサン＝シモン主義の影響を受けており、サン＝シモン主義者たちの宿願は四半世紀の後にこのかつての信奉者によって実現されたことになる。
- (24) サン＝シモンは「産業」と「組織化」を結び付けた「社会科学」(social science) を打ち立てたが、コントは一八二二年には「社会物理学」(social physics) という名で師の考えに挑戦することを試み、そして一八三九年には「社会学」(sociologie) という名前の新しい科学を打ち立てた [Richard Swedberg, *Tocqueville's Political Economy* (Princeton and Oxford, Princeton University Press, 2009), pp. 121-122]。
- (25) 杉本隆司「民衆・宗教・社会学 サン＝シモンとコント」宇野重規／伊達聖伸／高山裕二編著『社会統合と宗教的なもの 十九世紀フランスの経験』（白水社、二〇一二年）所収、七五―七七頁。
- (26) それ以外にも、サン＝シモン主義者グループを牽引したアンファンタンという指導者の個性もサン＝シモン主義の変質の原因として挙げなければいけないだろう。また、藤原孝は、変化の原因としてロマン主義を挙げている [藤原孝「サン＝シモンニズムの形成」(『政経研究』第三十九卷第三号、二〇〇二年) 八八頁]。
- (27) André Jardin, *Alexis de Tocqueville, 1805-1859* (Paris, Hachette, 1984), p. 383. [アンドレ・ジャルダン『トクヴィル伝』大津真作訳（晶文社、一九九四年）四四五―四四六頁]。

(28) *DAI*, 3:12, p. 725. [邦訳第二卷(下)五〇―五一頁]。トクヴィルは男女が同じ存在になるといふ考えには違和感を覚えていたが、デモクラシーによる平等化の流れの中で男女は平等になると考えていた。

(29) Hugh Brogan, *Alexis de Tocqueville, A Life* (New Haven, Yale University Press, 2006), p. 364.

(30) Brogan, p. 413.

(31) *OC*, III-3, pp. 189-192.

(32) *S*, 2:2, p. 787. [邦訳二二二頁]。引用中の括弧は本稿執筆者による注。

(33) *S*, 1:1, p. 736. [邦訳二二頁]。

(34) *S*, 2:2, p. 787. [邦訳一三〇頁]。

(35) *S*, 2:9, p. 842. [邦訳二二六―二二七頁]。

(36) *DAI*, 2:10, p. 643. [邦訳第二卷(上)一二四頁]。

(37) *OC*, III-3, pp. 170-171.

(38) *AR*, 3:3, p. 191. [邦訳三四二―三四四頁]。

(39) 根井雅弘『経済学の歴史』(講談社学術文庫、二〇〇五年)二六―二七頁。

(40) 根井、前掲書、二八―三〇頁。

(41) François Quesnay, “Maximes generals du économique d’un royaume agricole,” in *Œuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay* (Paris, Jules Peelman, 1888), pp. 329-337. [フランソワ・ケネー『経済表』平田清明／井上泰夫訳(岩波文庫、二〇一三年)二一九―二三〇頁]。以下に、その概要を記す。①主権は唯一であり、社会のあらゆる個人に対しても、また特殊利害に立つすべての不正な企てに対しても優越していること。②国民が、最も完全な統治を構成する自然秩序の一般法について教えられていること。③主権者と国民は、土地が富の唯一の源泉であり、富を増殖させるのは農業であることを決して忘れないこと。④土地財産と動産的富の所有権がそれらの合法的な所有者に保証されていること。⑤租税が破壊的なものでないこと。⑥耕作者の前払が十分であって、土地耕作の支出によって、年々最大の生産物を再生させ得ること。⑦収入の総額がす

べて年々の流通に復帰し、この流通の全範囲にわたって巡歴すること。⑧経済統治が関心を寄せるべきは唯一、生産的支出と粗生生産物との交易を助長することであるため、不生産的支出はなるがままに任せること。⑨耕作すべき大領土を所有して、粗生生産物貿易を容易に行うことのできる国民は、農業の労働と支出を犠牲にしてまで、製造業と奢侈品商業に資金と人を差し向けるようなことは避けなければならない。何よりもまず、王国は豊かな耕作者で満ちていなければならない。⑩諸収入の一部でも、貨幣あるいは商品の形態で還流することもなく外国に流出させないこと。⑪住民の富が王国の外に持ち出されてしまうため、彼らの国外流出は避けなければならない。⑫農村に耕作者 (laboureurs) がいなくなるようなことが起こらないように、富裕な農民 (fermiers) の子弟を農村に定住させること。⑬各人が、自分の利害や財力、土地の資質に見合った生産物を自分の畑で自由に耕作すること。そうすれば、でき得る限り最大の生産物が得られることになる。⑭家畜の増殖が奨励されること。⑮穀物の耕作にあてられる土地は、富裕な耕作者の経営する大農地にできるだけ統合すること。⑯売り上げがあつて初めて再生産が可能になるため、粗生生産物の対外商業を決して妨げないこと。⑰道路を修繕し、運河や河川、海を利用した水上交通によつて、生産物および手工業商品の販路を整備し、運搬を容易にすること。⑱王国内の生産物や商品の価格をわずかでも低下させないこと。豊饒と高価維持の両立こそ繁栄なのである。⑲貧困者にとつて、生産物の価格の安さがある利なことだとは思わないこと。⑳最下層の市民階級の生活の安楽 (aisance) を損なわないこと。㉑地主や投機的な職業を営む人たちが、彼らの収入や利益を流通と配分から切り離す、生産的ではない貯蓄に励むようなことがないようにすること。㉒奢侈的な装飾に熱中しないこと。㉓外国との相互貿易で国民が損害を被らないこと。㉔外国との相互貿易にあたって肝心なのは、販売した商品と購入した商品それ自体から生ずる利益の多寡を吟味することもせず、ただ貨幣での差額からだけ利益を判断して、安易な利益に欺かれられないようにすることである。㉕交易の完全な自由が維持されること。㉖人口の増加よりも、収入の増加に注意を傾けること。㉗政府は節約に専念するよりも、王国の繁栄に必要な事業に専念すること。㉘租税徴収や政府支出の財政活動が、貨幣財産集積の要因にならないこと。㉙一国家の非常の必要に応ずるための資力は国民の繁栄からのみ期待し、金融資本家 (financier) の信用貸からは期待しないこと。㉚国家は借入金を避けること。

(42) AR, 3:4, p. 204. [邦訳二二五頁]。

- (43) 川出良枝『貴族の徳、商業の精神 モンテスキューと専制批判の系譜』（東京大学出版会、一九九六年）一八四―一八九頁。
- (44) Francois Quesnay, “Despotisme de la Chine,” in *Œuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay* (Paris, Jules Peelman, 1888), pp. 563-564.
- (45) Albert O. Hirschman, *The Passions and the Interests, Political Arguments for Capitalism before Its Triumph* (Princeton, Princeton University Press, 2013), p. 96. [アルバート・O・ハーシュマン『情念の政治経済学』佐々木毅／日祐介訳（法政大学出版局、一九八五年）九六頁]。
- (46) ハーシュマンは、一方で政府の介入に対する市場の自由を擁護しつつ、他方で「正しい」経済システムを支持する全能の支配者によって市場の自由が強制されることを主張したフィジオクラットたちを「奇妙」と評している [Hirschman, pp. 97-98. [邦訳九七―九八頁]]。
- (47) *AR*, 3:3, p. 187. [邦訳三二七―三二八頁]。
- (48) 安藤裕介『商業・専制・世論 フランス啓蒙の「政治経済学」と統治原理の転換』（創文社、二〇一四年）四八―五二頁。安藤は、ケネーの理論は封建的秩序からの解放といった性格を有していたが、同時に政治体全体の有用性から導出された個人の物質的利益の追求を推奨する、ある種の功利主義的政治哲学を内包していたと述べている [安藤、前掲書、五六―五七頁]。
- (49) *AR*, 3:3, p. 190. [邦訳三二二―三二三頁]。
- (50) フランソワ・フュレも、トクヴィルはフィジオクラットの経済分析について、反コルベール主義の主張である自由放任については拘泥せず、あくまでも合法的専制のみに注目していると述べている [Francois Furet, *Penser la Révolution française* (Paris, Gallimard, 1985), pp. 239. [フランソワ・フュレ『フランス革命を考える』大津真作訳（岩波書店、二〇〇〇年）二七三―二七四頁]]。
- (51) *AR*, 3:3, p. 188. [邦訳三二八頁]。
- (52) *S*, Appendice II, p. 961.

- (53) 野村啓介『フランス第二帝政の構造』(九州大学出版会、二〇〇二年) 三三―三五頁。  
(54) OC, III-2[Écrits et discours politiques], pp. 742-744.

「トクヴィルと社会主義」参考文献一覧

〔トクヴィルの著作〕

Alexis de Tocqueville, *Œuvres Bibliothèque de la Pléiade*, t. 1-3 (Paris, Gallimard, 1991-2003).

Alexis de Tocqueville, *Œuvres Complètes* (Paris, Gallimard, 1951-). [論文内ではOCと略記]

・トクヴィルの著作を参考・引用する場合は、基本的には上記のプレイヤード版を用いる。上記プレイヤード版に収録されていないトクヴィルの文献については、ガリマール社版全集を用いる。

・トクヴィルの著作のうち、『アメリカのデモクラシー』(第一巻・第二巻) *De la démocratie en Amérique*, t. 1-2 (一八三五年および一八四〇年)、『回想録』*Souvenirs* (一八九三年)、『アンシャン・レジームと大革命』*L'Ancien Régime et la Révolution* (一八五六年)、『一七八九年以前と以後におけるフランスの社会・政治状況』*État social et politique de la France avant et depuis 1789* (一八三六年)、『貧困に関する覚書』(第一論文) *Mémoire sur le paupérisme* (一八三五年)および第二論文 *Deuxième article sur le paupérisme* (未刊)については、それぞれDA I / DA II, S, AR, ES, P1 / P2とこの略記号を用いて出典元を表記する。

それら以外の文献を引用する場合、基本的には上記のガリマール版全集を使用し、OCという略記号を用いて示す。

〔参考文献〕

安藤裕介『商業・専制・世論 フランス啓蒙の「政治経済学」と統治原理の転換』(創文社、二〇一四年)。



Louis Blan, *Organisation du travail* (Paris, Bureau de la société de l'industrie fraternelle, 1847), Bibliothèque nationale de France, 31 August 2014 <<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k24230t>>.

Hugh Brogan, *Alexis de Tocqueville, A Life* (New Haven, Yale University Press, 2006).

Robert Castel, *Les metamorphoses de la question sociale, Une Chronique du salariat* (Paris, Gallimard, 1995). [ロベール・カステル、ロベール『社会問題の変容 賃金労働の年代記』前川真行訳 (ナカニシヤ出版、二〇一二年) ]。

Sébastien Camille Gustave Charlety, *Histoire du Saint-Simonisme, 1825-1864* (Paris, Paul Hartmann, 1931). [セバスティアン・シャルレティ『サン＝シモン主義の歴史』沢崎浩平／小杉隆芳訳 (法政大学出版局、一九八六年) ]。

Louis Chevalier, *Classes laborieuses et classes dangereuses* (Paris, Perrin, 1958). [リュウヴァリエ、ルイ『労働階級と危険な階級 十九世紀前半のパリ』喜安朗／木下賢一／相良匡俊訳 (みすず書房、一九九三年) ]。

堂目卓生『アダム・スミス 『道徳感情論』と『国富論』の世界』(中公新書、二〇〇八年)。

Seymour Drescher, *Dilemmas of Democracy, Tocqueville and Modernization* (Pittsburgh, University of Pittsburgh Press, 1968). [シーモア・ドレッシンヤー『デモクラシーのディレンマ』桜井陽二訳 (荒地出版社、一九七〇年) ]。

Drolet, Michael, *Tocqueville, Democracy and Social Reform* (Basingstoke, Palgrave Macmillan, 2003).

Francois Furet, *Penser la Révolution française* (Paris, Gallimard, 1985). [フランソワ・フルレ『フランス革命を考える』大津真作訳 (岩波書店、二〇〇〇年) ]。

Albert O. Hirschman, *The Passions and the Interests, Political Arguments for Capitalism before Its Triumph* (Princeton, Princeton University Press, 2013). [アルバート・O・ハーシュマン『情念の政治経済学』佐々木毅／日祐介訳 (法政大学出版局、一九八五年) ]。

樋口陽一『近代国民国家の憲法構造』(東京大学出版会、一九九四年)。

今村仁司『近代の労働観』(岩波新書、一九九八年)。

川出良枝『貴族の徳、商業の精神 モンテスキューと専制批判の系譜』(東京大学出版会、一九九六年)。

- 川崎修『政治的なるもの』の行方』(岩波書店、二〇一〇年)。
- Keslasy, Eric, *Le liberalism de Tocqueville à l'épreuve du paupérisme* (Paris, L'Harmattan, 2000).
- , *Démocratie et égalité* (Paris, Breal, 2003).
- , *Alexis de Tocqueville, De la démocratie an Amérique, Pour une sociologie de la démocratie* (Paris, Ellipses, 2012).
- 菊谷和宏『「社会」の誕生 トクヴィル、デュルケーム、ベルクソンの社会思想史』(講談社選書メチエ、二〇一一年)。
- 松本礼二／川出良枝『近代国家と近代革命の政治思想』(放送大学教育振興会、一九九七年)。
- 中木康夫『フランス政治史』(上・中・下) (未来社、一九七五—一九七六年)。
- 根井雅弘『経済学の歴史』(講談社学術文庫、二〇〇五年)。
- 野村啓介『フランス第二帝政の構造』(九州大学出版会、二〇〇二年)。
- 重田園江『連帯の哲学Ⅰ フランス社会連帯主義』(勁草書房、二〇一〇年)。
- 大沢真理『イギリス社会政策史 救貧法と福祉国家』(東京大学出版会、一九八六年)。
- François Quesnay, *Œuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay* (Paris, Jules Peelman, 1888). [フランソワ・ケネー『経済表』平田清明／井上泰夫訳 (岩波文庫、二〇一三年)]。
- Henri de Saint-Simon, *Œuvres Complètes, I-IV* (Paris, Presses Universitaires de France, c. 2012). [アンリ・ド・サンシモン『サンシモン著作集』(第一巻—第五巻) 森博訳 (恒星社厚生閣、一九八七—一九八八年)]。
- Paul A. Rahe, *Soft Despotism, Democracy's Drift, Montesquieu, Rousseau, Tocqueville and the Modern Prospect* (New Haven, Yale University Press, 2009).
- ローレンツ・シュタイン『平等原理と社会主義 今日フランスにおける社会主義と共産主義』石川三義／石塚正英／柴田隆行訳 (法政大学出版局、一九九〇年)。
- Richard Swedberg, *Tocqueville's Political Economy* (Princeton and Oxford, Princeton University Press, 2009).
- 田中拓道『貧困と共和国 社会的連帯の誕生』(人文書院、二〇〇六年)。

- 宇野重規『トクヴェール 平等と不平等の理論家』（講談社選書メチエ、二〇〇七年）。
- 宇野重規／伊達聖伸／高山裕二編著『社会統合と宗教的なもの 十九世紀フランスの経験』（白水社、二〇一一年）。
- Sheldon Wolin, *Politics and Vision, Continuity and Innovation in Western Political Thought, Expanded Edition* (Princeton, Princeton University Press, 2004). [シエルドン・ウォーリン『政治とヴィジョン』尾形典男／福田歓一／佐々木武／有賀弘／佐々木毅／半澤孝磨／田中治男訳（福村書店、二〇〇七年）]。
- , *Tocqueville, Between Two Worlds, The Making of a Political Theoretical Life* (Princeton, Princeton University Press, 2004).

〔参考論文〕

- 北川善英「二月革命と労働権 (Le droit au travail) フランス人権史の一考察」(一・二) (『名古屋大學 法政論集』第八十一号、一九七九年) 一―五頁および(第八十二号、一九七九年) 一三三―一八五頁。
- 杉本隆司「民衆・宗教・社会学 サン＝シモンとコント」宇野重規／伊達聖伸／高山裕二編著『社会統合と宗教的なもの 十九世紀フランスの経験』（白水社、二〇一一年）所収、六三―九四頁。
- 藤原孝「サン＝シモン思想における『新キリスト教』の位置」(『政経研究』第三十三卷第一号、一九九六年) 四六七―四八二頁。
- 「サン＝シモンの後期国家論序説」(『政経研究』第三十七卷第三号、二〇〇〇年) 五九―七二頁。
- 「サン＝シモニズムの形成」(『政経研究』第三十九卷第三号、二〇〇二年) 七七―九五頁。
- Swedberg, Richard, "Tocqueville as Economic Sociologist?," *The Tocqueville Review*, Vol. 27, No. 1(2006), 131-167.
- 高草木光一「ルイ・ブラン『労働の組織』と七月王政期のアソシアシオニスム 普通選挙と「社会的作業場」(上) (『三田学会雑誌』第八十七卷第三号、一九九四年) 六四―八四頁。
- 「ルイ・ブラン『労働の組織』と七月王政期のアソシアシオニスム 普通選挙と「社会的作業場」(下) (『三田学会雑誌』第八十七卷第四号、一九九五年) 三八―五九頁。

政経研究 第五十二卷第二号（二〇一五年九月）

三五〇（四三三）

田中拓道「市場・貧困・統治 十八世紀末から一八三〇年代のフランスにおける政治経済学」〔『経済学史研究』第五十二卷第一号、二〇一〇年〕二〇―三四頁。